

# 校内研究活性化 プロジェクト研究通信



1学期が終わり、夏季休業が始まりました。研究委員の皆様におかれましては、新年度が始まって今日まで多岐にわたる業務の中、本プロジェクト研究への御協力をいただきありがとうございます。1学期の間に各実践校の校内研究会等を参観させていただきました。どの先生も自校の児童生徒にとってよりよい学びとなるように、教員一丸となって授業研究に臨んでおられました。今後の校内研究が活性化していくよう、我々も先生方と一丸となって研究を進めていきたいと思っております。さて、第2号プロ研通信では、第3回研究会での研究員の皆様の学びについてお伝えします。

## 第3回研究会 概要

第3回研究会は、6月25日(火)に行いました。この会では、まず、改めて本研究のゴールイメージを研究委員の皆様と共有しました。そして、目指す児童生徒の学びの姿の実現に向け、教員の学びを支える校内研究のあり方について協議しました。

## 第3回研究会の流れ

- 本研究のゴールイメージの共有(説明)
- 教員の授業観の転換と授業改善(演習・協議①)
- 専門委員より(指導助言①)
- 教員の学びを支える校内研究のあり方(演習・協議②)
- トータルアドバイザーより(指導助言②)
- 振り返り



演習・協議の様子

## 本研究のゴールイメージの共有

### 本研究のゴールイメージ

本研究では、児童生徒の学びの姿を見取ることを通じた教員一人一人の探究的な学びを校内研究の取組によって支えることで、児童生徒の学びの転換につながる「新たな教師の学びの姿」が実現すると考えています。これが本研究のゴールです。

教員の探究的な学びを児童生徒の学びの転換につなげる過程には、「教員の授業観の転換(授業に対する考え方が広がり、深まること)」と「授業改善」の繰り返しがあると考えています。そして、徐々に授業が変わっていくことにより、児童生徒の授業に対する考え方、つまり学びが転換していくと考えています。これが私たち研究員のもつ、本研究のゴールイメージです。



児童生徒の学びの姿を見取ることを通じた教員一人一人の探究的な学びを校内研究の取組によって支えることで、児童生徒の学びの転換につながる「新たな教師の学びの姿」が実現すると考えています。そして、徐々に授業が変わっていくことにより、児童生徒の授業に対する考え方、つまり学びが転換していくと考えています。これが私たち研究員のもつ、本研究のゴールイメージです。

## 教員の学びを支える校内研究

### 演習協議の方法

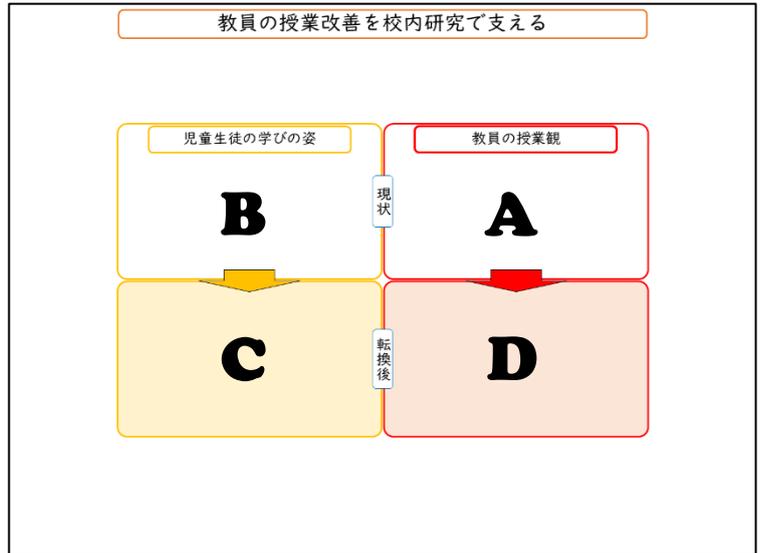
演習・協議①と②では、右図のようなシートを活用し、研究委員の皆様の御意見を整理していくKJ法を用いて協議を進めました。

#### 〈演習・協議①〉

目指す児童生徒の学びの姿の実現に向けた教員の授業観とは

それぞれの枠には以下の観点で意見を出していただきました。

- A**…教員の授業に対する考え方の現状
- B**…児童生徒の学びの姿の現状
- C**…目指す児童生徒の学びの姿
- D**…目指す児童生徒の学びの姿の実現に向けた教員の授業に対する考え方



演習・協議で活用したシート

本協議では、**C**の「目指す児童生徒の学びの姿」を実現するために、これから教員の授業に対する考え方をどのように広げ、深めていくことが必要なのかを、各実践校の実情と研究主題に照らし合わせながら考えていただきました。それぞれの枠で出していただいた御意見を研究員で集約させていただくと、以下のようになりました。

教師主導になりがちな授業から子どもの主体性を引き出す授業へ

子どもが目的をもって書いたり対話したりすることができるような授業へ

#### 〈演習・協議②〉

「教員の授業観の転換」を促進する校内研究の取組や役割とは

演習・協議①で使用した枠の外側に校内研究として自校の教員の授業観の転換、日々の授業改善をどのように校内研究で支えるのかを具体的な取組を挙げながら協議していただきました。御意見を集約させていただくと以下に示す10点の取組および役割が見えてきました。

- ・ 校内研究のもち方の工夫
- ・ 外部との連携
- ・ ○○スタンダードの作成
- ・ 時間の確保
- ・ 同僚性を高める
- ・ 共通実践
- ・ 子どもを中心に置いた授業改善
- ・ 0JT
- ・ ツールの活用
- ・ アンケート等での実態と変容の把握

協議で出てきた御意見の詳細は別紙「協議シートまとめ」にて御覧ください。

滋賀大学教育学部附属小学校  
副校長 齋藤 昌代先生による指導助言より

齋藤先生は前任校(S小学校)での御経験から、授業改善について御指導くださいました。

### 「授業観」とは

「授業観」とは「授業に対する考え方」です。今求められているのは「主体的・対話的で深い学び」や「個別最適な学び」、「協働的な学び」です。それらを自校の校内研究につなげていかななくてはなりません。

#### (1)実態をつかむ

目の前の子どもたちの強みと弱みを分析し、弱みを強みに変えていくために「必要な学び」を絞って取り組んでいくことが大事です。

#### (2)重点項目を置く

全校で統一して取り組むと、子どもたちの安心につながる。しかし、なぜそれをするのかということを教員が全員理解することが大事です。子どもたちの実態から、重点項目を決めて取り組むことでその他の力もついてきます。全職員で、重点項目への共通理解を図り、進めていくということが大切です。

#### (3)途中診断をする(振り返り)

教員も振り返りをするのが大事です。教員にもアンケートをすることで、共通実践の現状が明らかになります。すると「私も頑張ろう」という意識が生まれます。定期的に振り返る機会をもつことで意識を高め、授業改善につながっていきます。

#### (4)継続する

人事異動があればそこで研究が途切れるのではなく、その地域の子どもたちの学びがずっと継続していくように、私たちは実践を継続していかななくてはなりません。校内研究というのは礎を作ることです。そこに積み上げていくことで値打ちがあるのです。



滋賀大学大学院教育学研究科  
教授 辻 延浩先生による指導助言より

### 授業における教師の三つの知識

授業における教師の知識とは、「教材」「子ども」「教授方法」です。学習指導案においても、「教材観」「児童・生徒観」「指導観」を記述します。「新たな教師の学びの姿」で求められている授業観を変容させるためには、これらを個別に捉え直す必要があります。

「教材観」を変えるということは、今まで扱ってきた教材を子どもの学びに即して捉え直し、時には新しく教材を開発することです。

「子ども観」については、子どもを取り巻く家庭や社会、子どもの自尊感情も含めて多様に変化してきている状況に合わせて子どもを捉え直すことです。

「教授方法」については、子どもの学びに即して効果的な指導方法を工夫することです。ICTを活用する場合には、ICTが子どもの学びをどのようにサポートするのか予め予測しておき、従来の方法と何が違うのか、指導しながら見取っていく必要があります。



## 子どもを見取るとは

子どもについての知識を高めるには、四つの観点で見ることが重要です(図1)。図の真ん中よりも左側、これは外面で、行動・発言などのパフォーマンスとして読み取れます。まずは、行動から外面を捉えるという力が必要になります。しかし、外面からだけでは子どもを真に理解したとは言えないので、内面を捉えていかなくてはなりません。内面には認知特性と心理特性があります。子どもの認知構造は、アンケートや振り返り、インタビューなどからしかわかりません。または、会話に耳を傾けて「あ、〇〇さんはこんな風にとらえているんだ」というようなことで認知構造を捉えます。

## 三つの知識の複合領域

「教材」「子ども」「教授方法」という、三つの知識の交差を真ん中に手繰り寄せてきてその子を理解するというのが真の子どもを見取る力と私は捉えます(図2)。この複合領域が大事です。協議の話題に出てきている、「〇〇スタンダード」、これは「子どもの知識」と「教授方法の知識」の複合領域です。これを展開させるためには常に授業をリフレクションすることです。

## 子どもの学習経験と学習の型

子どもの学習経験が浅いとき、初めはやはり習得型になります。基礎的なことをきっちり学び、学んだことを活用するとき、活用型学習になり、活用の仕方が個人で理解できて、初めて探究型学習、「究める」となります(図3)。自己調整学習でもいきなり自己調整はできないので、基本的な学習スタイルというものをしっかり教えて、その中で自律的に展開できる、または仲間と協働的に展開できるという風になっていくのです。

## メンタリング

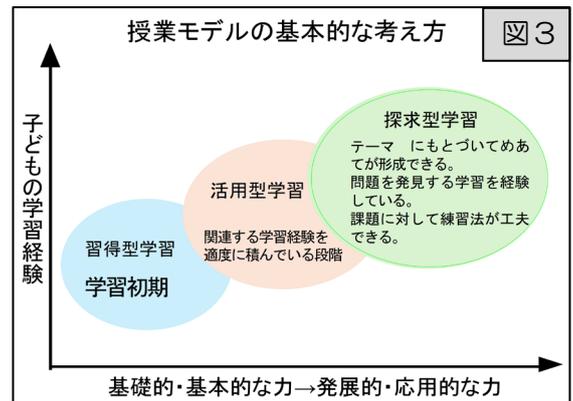
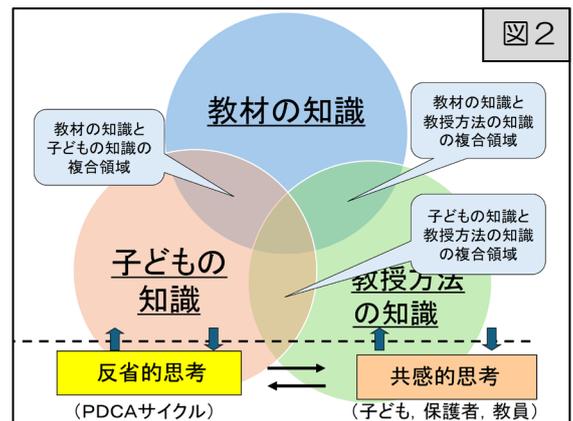
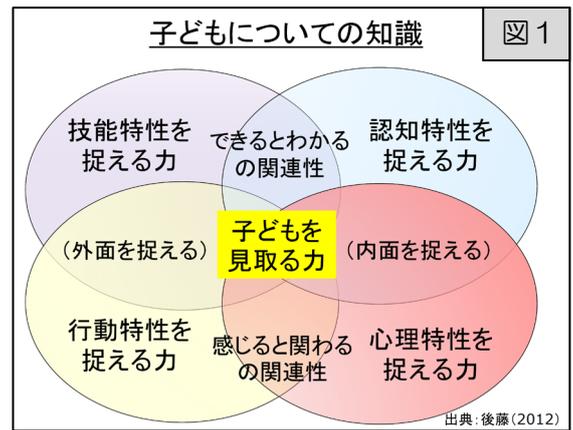
ぜひ校内研究にメンタリングという制度を取り入れていただきたい。「メンター」つまり、経験豊富な熟練者が、組織内の未熟練者、「メンティー」と定期的継続的に交流し、対話や助言によって自発的な成長を支援する行為です。

## On the Job Training

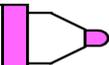
OJTとは、On the Job Trainingの略です。職場で行われる訓練のことをOJTと言います。OJTには、ぜひともメンタリングの手法を活用してください。それが2年次研修だとか、中堅教員研修などとうまくコラボしていくと効率化が図れるでしょう。

## 役割を与えるということ

校内研究に参考にしていただきたいと思うのは、人はやはり、役割を与えられたときに責任感が出てくるということです。責任感が出てきて仕事を実行したときに、周りから認められたり励まされたり、評価されたりすることによってやったことが自分の中に溶け込んできて、「次も頑張ろうかな」というエネルギーになります。そういう風になるということはみなさんの学級経営でもあるように、子どもたちと同じような図式が教員の中にもあります。チームとしてそれを機能させるにはどうすればよいか。研究主任と、それを補佐する人たちが一緒に校内研究の進め方ということを作っていくだけであれば、それが非常に重要で、肝になるのかなと思います。



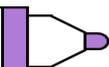
## 研究委員のみなさんの振り返り



### ○第3回研究会での学びを振り返って

- ・今までの校内研究では各学年の研究授業のつながりが、なかなかもてなかった。研究授業から自学級に生かそうなことを考え、次の校内研究で振り返ることのできる機会を作っていきたい。
- ・担任が子どもを見取るときに対話したり、成果物を見たりするように、研究主任も先生方と対話したり、振り返りを見たりして学びの意欲の把握を行うことが重要だと考えました。また、長としてゴールを理解しておくことが大切であるということも承知しているのですが、私自身が悩み、立ち止まることも多いため、まずは研究推進委員の先生方に頼ってみたいと考えました。
- ・「児童生徒の学びの姿」「教員の授業観」の整理をすることで、校内研究でやっていきたいことを確認することができました。答えがない分難しいのですが、様々なアプローチ方法や改善方法があると思うので、柔軟に校内研究に取り入れていきたいです。
- ・主任だけが計画して提案するのではなく、やはり職員で考えていくことが大切だと思いました。
- ・子どもたちを知るためには四つの特性を見ていくことが必要だという話を聞いて納得しました。外面だけでなく、内面も見たいと思います。
- ・子どもの姿で評価する、見取るという視点がこれまでの学校評価や研修の場ではあまりなかったように思います。また、子どもを見取るために四つの視点を教えていただきましたが、はたして全教員が正しく見とれているかというところも言えないと感じました。今後、何らかの機会に子どもを見取るという視点を教員と共有する必要があると感じました。

## プロ研通信第2号 編集後記



プロ研通信第2号では、校内研究活性化プロジェクト研究第3回の概要についてお届けしました。何事も「振り返り」が大事と言いますが、プロ研通信を書くにあたって研究会での自分自身の学びを何度も振り返ることでなぜ大事なかが分かったように思います。研究委員の皆様にお伝えしたこと、演習・協議での御意見、指導助言の内容を再度理解し直し、通信という形で文章としてアウトプットすることで頭の中が整理されます。すでに取り組んでいただいているのですが、校内研究でも学びを振り返り、アウトプットすることを大切にしていきたいなとキーボードを叩きながら思う今日この頃です。



研究員  
しまうち ゆうしやう  
島内 佑祥



研究員  
たけうち ちつや  
竹内 達哉

### 校内研究活性化プロジェクト研究 第5回研究会のお知らせ

会場校：S市立S中学校

日時：令和6年8月22日(木)13:30~16:30

第5回研究会では、S市立S中学校の校内研究会と教科研究会を参観させていただきます。また、校内研究主任の方との懇談をさせていただくことも予定しています。研究先進校の取組を参観していただき、各実践校の校内研究活性化に向けて共に学んで行きたいと思っております。よろしくお願ひします。